



「靴は一週間に一ペんだけ履いてあとは休ませてやるのが長持ちの秘訣。贅沢やけど、ほんまは靴のためにそれが一番なんです」

●メンズ・レディースとも1足6万円～  
●修理は1万5000円～  
※注文してから約1カ月半が必要

### 終わりのない靴づくりの仕事。 お客様の笑顔が何より力強い支えとなる

「靴コバヤシ」は福島さんで4代目となる、創業1921年の老舗である。

京都から大阪に出てきた福島さんの祖父が丁稚奉公をしたのが『小林靴店』だった。その後、祖父が独立し、コバヤシの名を掲げて店を開いた。職人を何人も雇い、かなり手広く商売をしていたが、戦災のため一時閉店。その後、福島さんの父が新たに曾根崎に店を開いた。父の死後、兄が一時継ぎ、29歳の時、福島さんが店を継ぐことになった。

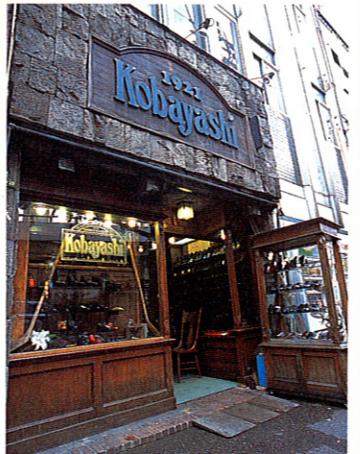
若い頃から店の工房に出入りしていた福島さんは、職人たちの仕事を見聞きして靴づくりを覚えていったそうだ。

「何が難しい言うて、靴づくりの難しさは、道具の多さやと思う。まず道具の使い方から覚えるあかんからね」。

24歳頃から自分の靴をつくりはじめ、かれこれ30年。福島さんが何よりうれしいのは、出来上がった靴をお客さんが履いて「うわつものすごく履きやすいわ」と喜んでくれる時に尽きたるという。

「けど靴づくりに終わりはないなあ。なんばやつても100%ということはない。やればやるほど自分の目も肥えてくるし、もつとええものつくろう、つくつてやろうとなつてくるねん」。

福島さんは仕事を離れて、街を歩く時でも、つい歩いている人の靴を観察してしまうらしい。「今、どんな靴が履かれているか、雑誌を見るより、街歩きした方が実感的だよ」。

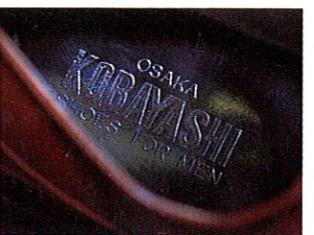


(右)店には使い込んだストーブが一年中燃えている。福島さんがゴム底を火にあてて柔らかくしたり、コテをあぶったりするために火が欠かせないのだ。「暑い夏に何ストーブ燃やしてんねんとよくお客様にいわれるけどな。こればっかりは消されへんわ(笑)」。

(左)お祖父さんの時代は、学校の制靴など大口の注文が増え、特にスケート靴で有名になり「スケート靴のコバヤシ」と言われるほどだったという。店先には当時の名残のアイスホッケーのスティックとバックが残っている。



06-6311-7368 大阪市  
北区曾根崎2-10-29 営業時間  
11:00～20:30、日曜・祝日12:00～17:00  
00 ④第3日曜 Pなし 阪急  
梅田駅2・3階改札口より徒歩  
7分



福島さんが使う道具は、包丁だけでも2～3種類、ワニ、目付、すくい針、縫い針、ドブカキ、ポン台…と一度では覚えきれないほどの数がある。東急ハンズなどに出かけて、さまざまな道具を見るのが休日の楽しみだとか。道具好きは職人の宿命なのかもしれない。



### 大人ならばいつかは履きこなしてみたい。 手づくり靴の真骨頂

しづがきれいに取れたら、すくい針と縫い針を使って、甲革と中底と靴の縁を重ねて縫い合わせていく。その後、本底を張りつけ、出し縫い屋と呼ばれる専門のところで本底を縫つてもらい、最後に福島さんが靴底の縁を研磨し、ロウを塗つて仕上げる。たかが靴と言うなれ。手づくりの靴といふのは、たつた一足を仕上げるのに、これだけの手と時間がかかるものなのだ。

こうして出来上がった靴は、手にとると

ずつしり重い。しかし一度足を通すと、またわりつくようにびつたりフィットして、すと軽くなってしまう。

「靴はサイズで履くもんやないというのがわかるやろ? 甲の横から後ろがしつかりくいけば、必ず足にフィットするもんやねん」と福島さんが会心の笑みを浮かべる完璧なフィット感。大量生産の靴に比べると決して安くはないが、こここの靴だけしか履かないという常連客が多いものもうなづける。

大人ならば一度は履きたい靴、修理し続けてもずっと履きたい一足、まさにそんな靴なのである。

木型に張り合わせた中底に印をつけ、包丁で溝を彫っていく。甲革師から甲革本体があがってくると、腰玉を入れ、木型にかぶせる。ここからが福島さんの本領発揮。つりこみ、すくいの作業に入る。ワニで革を引っ張り、小さな針を打ち込むつりこみは、履き心地と形の美しさが表れる重要な作業。「これが一番使いやすいんや」という爪切りで針を抜き、ワニで革をぎゅっと引っ張りしわを取る。これを丹念に繰り返した後、甲革と中底を重ね、すくい針と縫い針を使って縫い合わせていく。

